

【3. 聞いてみよう！あなたの知らない“土の世界”放射線セシウムとの関係 -】と【4. 土壌物理学者が仕掛ける農業復興—農民による農民のための農地除染】を読んで

・科学技術は生活を豊かにするためのものであるが、幅が広がるにつれ、本題を見失っているものもあるのではないかと思った。土やセシウム、粘土鉱物の関係を知っていれば、費用を大きく抑えて除染活動を行えたが、実際はそうはいかなかった。震災当時はこの学問のことを全く知らなかったため、該当地域の土をとってしまえば被害は減るが、深くまで浸透したセシウムはまだ残っているため、危ないのではと疑問を持っていた。しかし、土壌物理学を学び、溝口先生のお話を聴いた後では、セシウムが深くまで行くことはないため、表土を地中の土と交換すればよいことに納得した。遠く離れた地域にためるよりも安価で済む。また、ためておく地域を作る必要がなくなるため、より多くの地域での復旧が可能となる。科学技術を用いることで経済的損失を最小限にできたかもしれない場面で国の方針を決めていく人たちが専門家の意見を理解しなければ、科学技術の価値は減少する。原発に汚染された土を起因とした二次被害を発生させてはならないという責務を担う人やまた同じ土地で農業を行いたいと考える人には不安に感じさせることなのかもしれないが、それらのようなその学問に詳しくない人にも説明し、納得させることが科学技術のすべきことの一つなのだったと思った。科学技術は、平常時の快適さを提供するだけでなく、緊急時のより適切な対応をもたらすことなのだったと思った。また話とは少しずれるが、不安を抱く人の質問を専門家に尋ね、全体に広めていくことはマスコミの役割であり、それがきちんと作用しているかと考えさせられる一つの契機なのだったと思った。

・汚染土の上にそのまま客土すると表土を削ってから客土すると農地に残るセシウムの量が圧倒的に違うとあったが、なぜ違うのか疑問に残った。直感的には、はぎ取ったほうがセシウムの量が少なくなることはわかるが、セシウムの位置は時間がたってもほとんど変化しないのであるならば、上に客土を行えばあまり差は生まれないのではないかと思った。なぜセシウムの量が“圧倒的に”違うのか疑問に思った。

・実際に飯館村にも行く機会があれば行ってみたいが、飯館村のお酒である「不死鳥の如く」も飲んでみたいと思いました。

・将来国家公務員として働きたいと考えているため、なった際に緊急事態が起こった時の対処法を考えていく際に、専門家が公表しているものに対し、専門ではなかったからわからない、とスルーしてしまうのではなく聴いたうえで判断し、必要に応じて声を上げていけるようになりたい、なる必要があるのだと思いました。また、実際に行う方法で不安に感じる人がいればその人たちに丁寧に伝えていくこともすべきことの一つなのだったと思った。

・セシウムを含んだ粘土をどの場所に置いておくかという問題は対象の量が減っていても残っているのではないかという疑問を持っていたが、水が遮蔽し、空気中に飛散することを防ぐならば、ダムの下において置くというのは新たな場所を作らなくてよくなる良いことなのだったと思った。ただ、どのようにしていけるのか気がなった。

コメントの追加 [勝溝1]: それが、原発事故後に注目されるようになった「科学コミュニケーション」という分野です。

コメントの追加 [勝溝2]: セシウム入りの泥水をダムに誘導するだけです。

・科学者が専門に特化してより良い社会のために日々研究しているにも関わらず、それらを使わずに、その分野のことを全く知らない人が、専門家が提唱した方法では「不安が残るから」とバッサリ切ってしまうのは研究している意味がなくなるとまでいかずとも、大きく減少するのではないかと考えた。東日本大震災の際には、溝口先生は行政に伝えはしたが、行政は国民が安心する方法をとった。その時の行政の事情は知らないが、事実だけ見れば、専門家のコストを抑えられる方法の意見よりも無知な人が少しも考えずに安心できる方法を取り、科学技術への信頼がないのではないかと感じさせる結果となった。また、専門家の意見を聴き、国としての対策を固めていくべきなのに、国民への説明責任を放棄し多額の費用を使う代わりに誰でも簡単に理解がしやすく安心しやすい方法をとったのだと思いました。

・津波の被害を受けた地域のあとに残るものをがれきと言われ、処理されることに対し、地域の人ががれきと言わないでほしい、ごみのように扱わないでほしい、ごみのように見えても生活していた跡であり、マチだったものなのだからというのをきいたことがあるが、農地であっても全く同じなのだった。住んでいた人にとってのマチはかけがえのないものであるが、農民にとっての耕してきた土地は変えがたいものなのだった。だからこそ対処にかかわる人たちは廃棄物という意識で対処を行ってはいけないのだと思った。